

サーサナ

第60号 仏暦2566（西暦2023）年6月20日

一切皆苦

三法印の第三は一切皆苦です。

パーリ語ではサツベ・サンカーラ・ドウッカ。

「サツベ・サンカーラ」は、「諸行」とも訳されます（「諸行無常」）、ここでは「一切」となっていますが、「諸行」も「一切」も同じ意味です。

この法印の大事は「苦」とは何か、ということです。この漢字から受けるイメージとしては「肉体的苦痛」や「精神的苦悩」でしょう。もちろん、それも含んではいるのですが、原語の意味はもっと広く、「不満」「不安定」といったニュアンスをも含み、分かりやすい日本語でいえば「むなしさ」といえるでしょう。

仏教は、苦の解決を目指す教えです。つまり、むなしさを克服することが仏教の目的です。

「四苦八苦」という仏教用語があります。四苦とは生老病死の四つ。八苦とは、愛別離苦（親愛な者との別れの苦しみ）、怨憎会苦（恨み憎む者に会う苦しみ）、求不得苦（求めているものが得られない苦しみ）、五蘊盛苦（心身を形成する五つの要素から生じる苦しみ）の四つをさらに加えて八とします。要するに一切合切なのです。私たちの日常では「楽あれば苦あり」というように、「すべてが苦だ」という考え方は受け入れづらいかもしれません。確かに楽しいこともあります。しかし、これを「むなしさ」ととらえてみるとどうでしょうか。楽しいこともいつかは終わりが来て、そうした浮世の生活にむなしさをおぼえる、ということがあつたのではないのでしょうか。

釈尊は王族の家系に生まれ、何不自由のない生活を送っていました。外見からは苦とは無縁と見えても、おそらくその内面ではむなしさを感じていたのではないのでしょうか。釈尊は後に述懐します。

「わたしは、そのように富裕な家に生まれ、そのように幸福であったのに、わたしは思った。愚かなる者は、自ら老いる身でありながら、かつ未だ老いを免れることを知らないのに、他人の老いたるを見ては、おのれのことはいち忘れて、厭い嫌う。考えてみると、私もまた老いる身である。老いることを免れることはできない。それなのに、他人の老い衰えたるを見て厭い嫌うというのは、私にとって相応しいことではない。わたしはそのように考えた時、あらゆる青春の誇りはことごとく絶たれてしまった。」（アングッタラ・ニカーヤ3：38）

このような述懐が、病や死についても続き、「健康の誇り」も「生存の驕り」もことごとく絶たれてしまった、といます。ここでは、老病死が根本的な苦として語られているわけですが、生まれることもまた苦の一つとしてあげられていることに注目せねばなりません。なぜかといえば、死の原因が老病であるのと同様、老病の原因は生であるからです。

ここから、「仏教は反出生主義（人間は生まれてこない方が良かった、という考え方）だ」という主張をなせる方が時折いらっしゃいますが、そうではありません。仏教の世界観では、すべての生き物は永遠に生まれ変わり死に変わりしている（輪廻）ので、人間としての生以前に六道輪廻があり、そこを解決しない限り、単に「生まれてこなければよかったのに」と嘆いていてもなんの意味もありません。

そこで、その苦の根本を解決するために、八正道という具体的な道筋がしめされます。これは、人間だけがなしうる実践なので、その意味では、人間として生まれた、そのことが苦の根本的解決にはどうしても必要になります。

「人間の身を受けることは難しい。死すべき人々に寿命があるのも難しい。正しい教えを聞くのも難しい。」（ダンマパダ182）

せつかく人間として生まれてきた、それを千載一遇のチャンスとして、教法を聞き、解脱＝涅槃への道を歩むべきである、というメッセージです。



永代経懇志お礼

下記の方から永代経懇志を頂戴いたしました。ここにあらためてお礼申し上げますと共に、今後とも法義相續されますことをお願いいたします。

4月19日 坂口様[天白区] 10万円

法要行事について

各法要・行事に必要な勤行本は、お持ちでない場合は当寺より進呈または貸与いたします。念珠は必ずご持参ください。また肩衣の着用を推奨します。



六月 帰敬式（おかみそり）

帰敬式は仏教徒（真宗門徒）になるための儀式です。仏教に帰依したことを名実共に証するもので、受式することにより法名が授与されます。法名は「死んだ人の名前」ではなく、仏教徒としての名前（名告り）です。

例年、6月28日に開催していましたが、今回は事情により1年延期いたします。来年6月の受式を希望される方は、7月末までに電話またはメールでお申し込みください。その後一定回数の聞法（名古屋東別院または当山）をしていただくこととなりますので、あらかじめご了解ください。（外出困難な方については別途ご相談に応じます。）

八月 盂蘭盆会（うらぼんえ、お盆）

もともとは、釈尊の弟子の目連尊者が、餓鬼道に堕ちた母を救うために、安居（集中講義）の終わる7月15日に、大勢の出家僧侶に飲食物の供養を行なったことに由来する行事です。

- ❖日時 8月13日（日）午前8時～9時
- ❖内容 勤行（和訳阿弥陀経、正信偈同朋奉讃）、法話（住職）
- ❖持ち物 勤行本（『抄訳佛説阿弥陀経』『正信偈同朋奉讃』）

盂蘭盆会について個別（家族単位）でのお勤めをご希望の場合は、次のいずれかにより予約して下さい。

1. 本堂でのお勤め

8月14日午前8時より正午まで、15分刻みでご希望の時間を指定していただけます。先着順です。十六家族様まで。

2. 自宅の御内仏前でのお勤め

13日（午前・午後・夕方）、14日（午前・午後・夕方）、15日（午前・午後・夕方）のうちのいずれかの時間帯を選んでください。午前とは9時から12時まで、午後とは1時から4時まで、夕方とは5時から7時までをいいます。これ以外の日時は応相談。

ユニセフ募金

3月29日、皆様からお預かりした浄財25,181円を公益財団法人・日本ユニセフ協会へ振り込みました。累計では328,503円になりました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

会費の納入について

会費の期限切れの方は、更新をお願いします。皆様の納入年度は封筒宛名シール下部に記されています。1年で1,000円ですが、事務軽減のため、複数年を納入していただくとたすかります。

郵便振替00880-4-68473「教心寺」、または現金手渡しで。

銀行振込の場合は、ゆうちょ銀行八八九支店・当座・68472「教心寺」

教心寺ライブラリーから (7)

高史明・高橋哲哉『いのちと責任』

(大月書店、2012年)

高史明(コ・サミョン)さんは、在日朝鮮人の作家で、ご子息の自殺を契機に深く親鸞の教えに帰依し、真宗についての講演や執筆活動を精力的になさっています。現在91歳。高橋哲哉さんは哲学者で、現在は東大の名誉教授。作家にして真宗門徒の高さんと、西洋哲学者の高橋さんとの対談が本書の内容です。お二人の共通点は「現実に関わって思索する」ことにあります。特に、3.11以後、日本という「場」にあって、その「場」を主体的に生きるとはどういうことなのか、を共通の問題意識として議論が展開していきます。そこでは繰り返し宗教が話題にのぼります。多くの日本人が宗教というものを敬して遠ざけているなかで、お二人は、宗教が戦前の日本でどう悪用されて来たか徹底的に批判し、私たちがどう宗教と向き合うべきか、重大な示唆を投げかけています。論文で読むと難しくついていけないようなテーマでも、本書は対談なので読みやすく、刺激的でした。

真宗大谷派 教心寺 (名古屋教区第30組)

編集発行人 釋眞弼 (山口眞一)

468-0026 名古屋市天白区土原3丁目205番地

電話：801-1381 FAX：807-1198 電子メール：kyosin@nagoya30.net

URL <http://www.nagoya30.net/temple/kyosin/>
